RCCP
The Research Center of Community Partnerships

京都女子大学 地域連携研究センター

Annual Report 2016

京都女子大学 地域連携研究センター

Annual Report 2016

Contents

創刊によせて …… 1

Ⅰ　京都市「学まち連携大学」促進事業 …… 2

企業との連携活動

寄附講義　株式会社朝日新聞社 …… 5
寄附講義　阪急電鉄株式会社 …… 6
寄附講義　株式会社三井住友銀行 …… 7
寄附講義　野村證券株式会社 …… 8
学生による酒造り体験 …… 9

行政との連携活動

京都刑務所との連携活動 …… 10
京女＝福堂方式 …… 11
児童学科矢野ゼミによる連携
矯正展／木工製品デザインの提案 …… 12
～音楽教育学専攻　ガハプカ先生による連携～
「自己をコントロールするための呼吸法」 …… 13
その他行政との連携活動
京都府警察／京都市中央卸売市場 …… 14

地域との連携活動

児童学科松崎ゼミによる連携 …… 15
京都女子大学人形劇団たんぽぽの地域連携活動を通して …… 16
市民とともに、まちづくり活動
元吉町町内会まちづくり部／東山南部地域活性化委員会 …… 17
弥栄自治連合会 …… 18

京女ネットワーク協議会（通称：京女ラウンドテーブル） …… 19

Ⅱ　京都市「学まち連携大学」促進事業と
「京（みやこ）グローバル大学」促進事業の学内説明会（公聴会） …… 20

Ⅲ　大学との連携活動

奈良女子大学
奈良女子大学と包括交流協定を締結／合同シンポジウム …… 21

Ⅳ　履修証明プログラム

京都案内マイスター養成プログラム／仏教プログラム …… 24

Ⅴ　平成28年度冬季特別公開講座等 …… 25

Ⅵ　その他の連携活動 …… 26

京都女子大学地域・産学官連携ポリシー …… 27
平成28年度主な活動実績 …… 28
連携協定締結先一覧／Access Map …… 29

創刊によせて

京都女子大学は、長年にわたって大学、学科、附属研究所、教員、クラブ、学生個人のあらゆるレベルで、多様な地域貢献活動や企業との連携に取り組んできました。地域連携研究センターは、これらの連携活動を組織的に推進し、活動の深化を図ることを目的として、2015年10月1日に設立されました。それから1年6か月の間に予想をはるかに超える連携関係の展開と活動の多様化を進めることが出来ました。

この間の大きな出来事としては、まず2016年度に、京都女子大学では初めての企業の寄附による産学連携科目を共通領域の中の「教養科目」として開講したことが挙げられます。さらに10月には、京都市補助事業「学まち連携大学」促進事業に採択されました。これによって地域連携研究センターの活動に一層弾みをつけることになりました。

大学における連携活動は、一つには地域社会の構成員でもある大学が果たすべき社会的責任という側面を持っていますが、もう一つには、地域との協働関係で初めて実現できる教育を実践することにあります。多くの女性が地域活動に携わり活躍しているものの、地域活動のリーダーのほとんどが男性で占められているのが現実です。地域社会の日常に寄り添い、地域に山積する諸課題を女性の視点で発見し、自ら解決する実践力と組織力を有した女性人材の養成は、女子大学の責務であるとの考えに立ち、地域連携研究センターでは連携志向型教育の実践と多様な連携活動を推し進めています。

地域連携研究センター設立以来、様々な学外機関からの呼びかけで、本学の連携関係が急速に広がりをみせています。一つのつながりが、さらに新たな関係に展開するという嬉しい現象も生じてきています。また、これまで連携活動に関わっておられなかった先生方が、積極的に関与してくださるようになったことも嬉しいことです。

地域連携研究センターは、行政や企業、市民と地域課題を共有し、win winの関係で連携活動を展開することをモットーとしています。連携活動は学内外の皆様の協力で初めて成り立ちます。どうぞ引き続きご支援・ご協力を賜りますようお願いいたします。

京都女子大学　地域連携研究センター長　竹安 栄子

I 京都市「学まち連携大学」促進事業
2016（平成28）年度～2019（平成31）年度

京都市が2016年度に、大学の正規科目として連携志向型教育課程を構築することと、京都市内の自治体・企業・民間団体などの諸機関と大学との連携活動を推進することを目的として、募集した「学まち連携大学」促進事業に採択され、10月から本格的に活動が始まった。

I-1. 「地域系女子養成プログラム（副専攻）の構築」――地域社会を支える女性リーダーの養成をめざして――

京都市が抱える課題解決に資する連携活動を通して、人口減少・過疎化の進む日本社会を支える女性人材を育成することを目的としている。地域社会の日常に寄り添い、地域の諸課題を女性の視点で発見し、自ら解決する実践力と組織力を備えた女性人材の養成をめざす。特に本学の教育課程は、社会の現状分析力を担う社会科学に加えて、家政系自然科学（衣食住）、歴史・文化、福祉・学校教育など「生活」に直接アプローチできる実践的な学問領域に特色を有している。少子高齢化という地域社会が抱える諸課題を、日常生活レベルから考察する力およびその解決に対応できる科学的思考力を有した地域社会の担い手を養成することは、女子大学としての本学の社会的責務であるとの考えから本教育プログラムは構築されている。

I-2. これまでの連携活動の実績

京都女子大学は、長年にわたって大学、学科、附属研究所、教員、クラブ、学生個人のあらゆるレベルで、多様な地域貢献活動や企業との連携に取り組んできた。その特徴は、地域にきめ細やかに寄り添い、女子大学の特性を生かして、子育て・教育・高齢者の生活支援、さらに町内会活動支援など日常的な生活課題に視点を置いた地道な活動を積み重ねてきたことにある。

栄養クリニック「健康相談・料理教室」
京都市中央卸売市場と食物栄養学科の連携活動
京都府警察自転車交通安全ポスターの制作
京都市交通局駅ナカアートプロジェクトへの参加
生活造形学科「空き家調査・空き家見守りボランティア事業」
『京都の未来』区民会議への教員と学生の参画
東山区役所まちづくりカフェ@東山への学生参加
東山図書館との地域プロジェクト
児童学科音楽隊の訪問演奏活動
教育学科の社会教育実習
現代社会学科の修道学区町内会活動支援
ムーンバットとの連携による日傘の制作と若年層・訪日観光客への普及活動
伏見区内の酒造会社における酒造り体験　　など

I-3. 展開する事業内容

1）連携志向型教育プログラムの構築

連携活動の正課化からさらに進んで、副専攻として構築する。

目的：①専門分野での問題解決能力と実践力の養成
②リーダーシップ能力の涵養

2）正課内外での連携活動

・各学科の演習科目内で展開する連携活動と、正課内外の自主的活動
・京都市内全域、中でも大学が立地する東山区の地域特性に根差した重層的・多角的な連携活動を、5学部10学科と大学附属研究所、事務部局を包含した全学体制で展開する。

3）「京女ネットワーク協議会（京女ラウンドテーブル）」の組織化

連携協定締結先の自治体、地域、企業等との定例的な協議機関として連携機関のニーズや地域の課題を共有するとともに、事業の進捗状況を踏まえた客観的評価を受けながら、次年度の事業に反映する。

I-4. 連携志向型教育プログラム「地域系女子養成プログラム（副専攻）」の構築

2019（平成31）年度に開設をめざす「地域系女子養成プログラム」の試行段階として、全学部生対象の共通科目に新たに「連携活動科目」を開設する。

様々な地域や産業に関心を抱き、地域・社会で活躍するための知識や創造力を育成することを目的とし、1回生から履修できる入門科目を設け、連携活動の社会的意義・大学や企業の社会的責任について理論的に学び、課題解決に向けて学生の地域貢献活動への主体的な参加を促進する。あわせて連携活動で必要とされる倫理的配慮についても学習する。

◎入門科目

「連携活動入門」
（1回生以上　後期開講　2単位講義）

◎連携講座

「地域連携講座A1・A2」
（1回生以上　後期開講　2単位講義）

「地域連携講座B1・B2」（平成29年度開講）
（2回生以上　前期開講　2単位講義）
地域連携講座B1：「地方自治体の取組みを学ぶ」地域連携講座B2：「京都の社会と連携活動」

「産学連携講座A1・A2・A3」
（1回生以上　後期開講　2単位講義）
（株）三井住友銀行、野村證券（株）、阪急電鉄（株）による寄附講義

「産学連携講座B1・B2・B3」
（2回生以上　前期開講　2単位講義）
（株）朝日新聞社、大阪ガス（株）による寄附講義

◎課題研究

「連携課題研究」
（2回生以上　前期または後期開講　2単位演習）
平成29年度不開講

※2017（平成29）年度開講科目については「I-7. 新たに開設する連携科目」参照。

教育プログラム開発チーム（学まち連携事業実施委員会）

連携志向型教育プログラム「地域系女子養成プログラム（副専攻）」の構築をめざして、「教育プログラム開発チーム（学まち連携事業実施委員会）」が発足した。

メンバーは地域連携研究センターのコーディネーターを中心に組織し、先進事例の調査や先行カリキュラムの精査、具体的プログラムの検討に取り組む。

メンバー

竹安　栄子（地域連携研究センター長）
梅田　千尋（文学部　史学科准教授）
岩槻　知也（発達教育学部　教育学科教授）
松崎　行代（発達教育学部　児童学科准教授）
森久　聡（現代社会学部　現代社会学科准教授）
西尾久美子（現代社会学部　現代社会学科教授）
桜沢　隆哉（法学部　法学科准教授）
宮脇　尚志（栄養クリニック長）
阿部　純宏（教務部次長）

I-5. 正課内外での連携活動

イシュー別4領域（①子育てと高齢者支援、②安心安全・まちづくり支援、③京都・東山の歴史と文化、④京都の産業支援）において、多様な連携活動を展開した。2016（平成28）年度後期に新たに展開した活動は以下の通りである。

1）協定先を中心とした連携活動

●**京都刑務所**：呼吸法講習、矯正展ワークショップ、木工コラボ

●**阪急電鉄（株）**：学生による高架下ビジネス提案等

●**京都市中央卸売市場**：落語研究会による「まちおこし寄席」参加

2）その他の機関との連携活動

●**元吉町まちづくり部の活動支援**

●**弥栄自治連合会（すこやか学級）の活動支援**

I-6. 京女ラウンドテーブルの組織化

連携協定締結先の自治体、地域、企業等との定例的な協議機関として「京女ネットワーク協議会（通称：京女ラウンドテーブル）」を結成した。

I-7. 新たに開設する連携科目

2016（平成28）年度から始まった企業の寄附講義に加えて、2017（平成29）年度から新たな連携活動科目が全学部を対象として開設される。

連携活動入門

連携活動への誘い（1回生以上　後期開講　2単位講義）

この科目は、連携活動に従事するにあたって知っておくべき基礎的な事項や、身につけておくべき倫理事項、さらに実際に展開されている様々な形態の連携活動についての講義である。

この授業では、まず第1に、なぜ今、連携活動が社会的に求められているのか、その背景にある日本社会の課題から説き起こし、多くの連携活動の場となる地域社会の構造や地域社会が抱えている課題が、具体的な事例を交えながら講義される。

第2には、大学ならびに大学生が様々な形で社会に出て、市民や企業人などの現場の実務者と一緒に活動することが、学生自身の成長にどのような意義を有しているのか、また社会の側にはどのようなメリットがあるのかを、実際の連携活動を例にとり挙げて解説しながら学生とともに考える。

第3に、この授業では学外に出て地域社会で連携活動に従事するにあたって心得ておくべき倫理事項や、個人情報の保護にかかわる事柄も学ぶことを目的としている。連携活動を通して知りえた情報の保護だけではなく、学生自身が自身の情報を適切に管理することを学ぶことは、大学においてだけではなく、社会に出てからも重要である。連携活動に携わるすべての人が身につけておくべき基礎的知識としてこの授業で体系的に学習する。

最後に、この科目の副題（「連携活動への誘い」）からも理解されるように、連携活動に入るきっかけをこの授業でつかんでもらいたいとの意図で、「プチ連携活動」の体験が課せられている。すなわち、予め用意されたメニューの中から1つを選んで、実際に活動に従事し、その体験を客観化したレポートが課題として課せられる。これは「関心はあるが、なかなか最初の1歩が踏み出せない。」という学生が、これをきっかけに自信を持てくれることが期待される。

地域連携講座B1

地方自治体の取組みを学ぶ
（2回生以上　前期開講　2単位講義）

21世紀になって人口減少局面に突入した日本において、多くの自治体が人口構造の急激な変化に対応すべく様々な努力を続けている。本講義では、本学が就職協定を締結している6つの自治体の行政担当者のリレー講義によって、次の能力を養成することを目的としている。

①現代社会の現状と課題を研究する。
②地域に関する現状と施策を理解する。
③地方自治体の行政を学ぶ。
④論理的な思考を磨き、意見・考えを文章にする。
⑤自ら活動する方法を学ぶ。

この授業で、地方自治体が直面する課題を自ら発見し、解決に当事者意識をもつようになることが期待される。

●講義内容の概要

- **人口減少社会の現状と課題**
- **福井県**　ローカルをより面白く！若者が活躍できるまちづくりとUIターン政策
  女性の活躍が地域を変える！「共働き日本一」の福井の女性活躍政策
- **広島県**　仕事も暮らしも。欲張りなライフスタイルの実現ーひろしま未来チャレンジビジョン
  女性の活躍、少子化対策等の実現に向けて
- **静岡県**　ふじのくに静岡県の現状と課題
  強くしなやかに静岡県で働く
- **鳥取県**　鳥取発の地方創生　ー現状と課題ー
  鳥取発　誰もが輝く地方創生の取組
- **香川県**　香川県について:地理・自然・人口の推移や少子高齢化の現状、産業、特色や行政課題
  四国の地域活性化への取組み　ー四国遍路の世界遺産登録ー（香川県）
- **石川県**　石川で働く京女OBが本音で語る　石川県の幸せのカタチ

地域連携講座B2

京都の社会と連携活動（2回生以上　前期開講　2単位講義）

本講義は、行政や企業、各種組織の実務担当者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの分野からみた京都の社会や産業の実態を講じてもらうオムニバス形式の授業である。京都市の地域社会としての姿と京都市が直面する課題を多角的視点から理解し、かつ課題解決に向けて学生自身が地域貢献活動に主体的に取り組むよう学生の行動を促進することを目的としている。

ゲストスピーカーに、それぞれの組織が実施している連携活動を紹介し、学生の参加を直接呼びかけてもらうことによって、学生が自分たちが社会で活動することが期待されているという事実に気づくことが期待される。

●講義内容の概要

- **京都市役所**
  京都市の概要と大学生の連携活動の実態について
- **東山区役所**
  東山区の特徴や概要と京都女子大学の学生が携わっている地域連携活動について
- **NPO法人京都景観フォーラム**
  京都の魅力的な町並みや風景を、受け継ぎ守り育てる地域の人達と、それを支える行政やNPOなどの、最前線の取組みについて学ぶ
- **東山総合支援学校**
  京都における特別支援教育の歩みを辿るとともに、現代社会において「障害」とは何なのかを考える。また、総合支援学校の教育活動について、児童生徒や保護者の視点に立つ試みを通して理解を深め、共生社会の形成をめざす主体者としての素養を養う。
- **京都刑務所**
  京都刑務所における受刑者の実情と社会に貢献する刑務官の姿
- **朝日新聞社**
  日々報道を続ける記者の視点で、京都を巡る現状や課題などを、取材現場の話を交えながら伝える
- **京都市中央卸売市場**
  市民の台所を支える中央卸売市場の仕組みと役割
- **招徳酒造株式会社**
  伏見の酒造りの伝統と、酒造産業が抱える課題を解説する。女性杜氏も登壇する予定
- **ハイアットリージェンシー京都**
  ホテル業界の視点から京都の観光について話をするとともに、地域の一企業として東山区の観光振興に果たす役割についても解説
- **京都信用金庫**
  京都という地域で、人々の「くらし」を支える金融とはどのようなものか。京都信用金庫の現場女性職員の話を通じて、地域金融機関が担う役割を考察
- **京都銀行**
  地方銀行の役割や、京都銀行の概要および女性の活躍推進に関する仕組みについて説明し、今後の自身のキャリアについて考察。さらに、京都銀行の地方創生や地域活性化への取組みについて、具体的事例や最新の動向を解説
- **京都ジョブパーク**
  大学生の就職指導にあたる立場から、京都の多様な企業の実態について解説

I 企業との連携活動
寄附講義

株式会社朝日新聞社

◎講義期間：平成28年度後期（9月～1月）
◎講義テーマ：新聞を通じて、現代社会の諸問題について理解を深め、社会に対する問題意識を養う。
1. 新聞を通じ情報リテラシーを高める。
2. 現代社会の諸問題について自分の考えをまとめる力を養う
3. プレゼンテーション能力の向上をめざす。
◎講義の概要：現役の新聞記者が新聞を活用して、様々な社会問題をテーマに講義を行う。
学生は、それぞれの意見を小論文として、執筆・提出し、新聞社が全員分を添削して講評する。
◎受講者数：81人

◆講師コメント

「現代社会の窓」とも言われる新聞を通じて、世の中で起きている様々な事象の本質を学ぶことで、社会性を身につけてもらうと同時に、その事象についての自分の主張を小論文にまとめ、文章力・表現力の向上を図る――。それが、今回の連携講座の趣旨でした。

難民問題や日韓関係、子どもの貧困など、各分野で専門的な取材活動をしている弊社の記者が講義をし、テーマごとに多様な切り口や考え方があることを紹介しました。学生たちは皆、熱心に聴き入り、小論文執筆を念頭に、持論をどう展開するか考えをめぐらせている様子が伝わってきました。この講義が「社会と向き合う力」の蓄積に少しでも貢献できたのであれば、これ以上の喜びはありません。

講師陣の記者たちからも、コメントペーパーや小論文を通して学生がどう受け止めたかを知ることができ、今後の取材に生かせる、との声が寄せられました。こうした双方向性がマスメディアの将来像を考える上で貴重な機会になったことは疑いがなく、講座を開設していただいた大学関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

朝日新聞大阪本社編集局長補佐
関岡　哲哉

◆受講生の感想（授業コメントペーパーより抜粋）

- 講義を通じて、様々な分野の状況・問題・意見を聴き、自分の考えを深めることができた。それも、ただ、ぼんやり、何となくの思いではなく、根拠や情報に基づいた意見を持つことができた。また、文章を書いて、添削していただいたことで、自分の文の長所、短所がわかった。しばらく、新聞から遠ざかっていたが、この講義を受講して、再び興味がわき、読む機会が増えた。これからも継続して購読していきたい。
（国文学科　3回生）

- 今まで新聞も読まず、ニュースに関心が持てなかったが、この講義を受講してから、新聞を読むようになった。毎回、様々な社会問題をわかりやすく取り上げてくださったので、とても勉強になった。これからも、社会問題に目を向けて、自分なりの考えを持つようにしたい。（国文学科　3回生）

- この講義を受講して最も印象に残っているのは、どのように良い文章を書くのかということだ。書きたいことがまとまっていても、文章にすると無駄な部分があったり、読みづらい表現があったりすることが分かった。3回の小論文の作成で、授業前よりも、文章が書けるようになったと思う。
（史学科　3回生）

- 今回の講義は、記者の方々の生の声で記事になった社会問題などについて聞けたので、報道など、メディアをはじめとする情報に対する捉え方が少し変わった気がする。記事を書く中にも、制約があることを初めて知った。また、文章の書き方を学習し、書くことに少し自信が持てるようになった。
（生活造形学科　3回生）

- 幅広い社会の問題や、今後の課題などに重点をおいた講義を聴き、ニュースに関心を持てるきっかけとなった。家にあっても読まなかった新聞に目を通すようになった。
（教育学科　心理学専攻　2回生）

- 様々な社会問題について学ぶことができ、これからも関心を持っていきたいと思った。小論文の書き方についてのアドバイスを真摯に受け止め、文章力をのばしたい。
（現代社会学科　2回生）

阪急電鉄株式会社

◎講義期間：平成28年度後期（9月～1月）

◎講義テーマ：民営鉄道事業（阪急電鉄グループ）と地域社会。

- 京阪神地域の近代化の歴史を「私鉄」の歩みを通して理解。
- いわゆる「私鉄」が沿線地域に果たしてきた役割についての理解
- 受講者自身が企業の姿を具体的に知ることを通して、自分自身のキャリアを考察する機会を提供。

◎講義の概要：阪急電鉄グループの事業内容を素材に、事業の創始時代から今日までの歩みを時代背景、事業の仕組み等について解説を加えながら、地域や市民生活にどのように関わり、その発展に寄与してきたかを説明する。また、現役の社会人である講師の考え方や話を通じて、「仕事をする」ことの奥行きの深さや面白さに触れることで、自身の今後のキャリアについて考える機会とする。

◎受講者数：137人（予備登録時に受講希望者が400人を超えたため、抽選を実施した。）

◆寄附講座を終えて～講師インタビューより（抜粋）～

阪急電鉄株式会社　人事課長　小原　一泰　様

（以下O：阪急電鉄株式会社　小原 一泰様　I：インタビュアー（地域連携研究センター）

I：終えられて、特に印象に残ったことをお聞かせください。

O：京都女子大学の学生さんは、皆さん、真面目、実直、しっかりしていて安心感が持てるという印象を受けました。
毎回のコメントペーパーは、ぎっしりと、真剣に書いてくださる学生さんが大半で、先ほどの学生さんの印象も、そんなところから感じたものです。また、梅田のフィールドワークをレポート課題にしたのですが、皆さんきちんと提出していただきました。出席率も大変よく、やっている方としては、遣り甲斐も感じました。

I：学生からは、企画のやり方に触れたり、キャリアについて考えたり、とても役立つ興味深い講義だったと好評でした。授業で工夫された点は?

O：私どもは、社内での研修や制度説明会などにおいて、大勢の人を対象に話をする機会が比較的多くあります。わかりやすい資料を作成し、相手が聞いて理解しやすい説明をするということは、会社での仕事においては部署に関わらず必要なスキルだと考えています。また、研究者である大学の先生方の場合、そのお立場上、どうしても専門的かつ学術的な正確さに重点をおいた説明を求められることと思われますが、一方で、私どもの今回の講義では、スクリーンを使用して写真などのビジュアル素材を多用するなど、正確さ・緻密さよりは、多少説明の省略があってもわかりやすさを優先した内容になっています。

I：講師をされた感想をお聞かせください。

O：講師を担当するにあたり、自分のやってきた仕事を再整理したり、会社の歴史についての資料を読み返したり、沿線のことについて調べ直すなど、改めて勉強するよい機会となりました。自分が直接かかわっていない他部署の業務について初めて知ったことも多々ありました。また、一連の講義やその準備を通じて、多くの資料が蓄積できましたので、これらについては、社内の研修にも生かしていきたいと考えています。

I：学生へのご意見があれば、お願いします。

O：梅田に行ったことがない、あるいは電車を利用して出かける機会はほとんどないという学生さんが意外と多く、少し驚きでした。せっかくの関西での学生生活なので、京都市内はもとより、大阪や神戸にも出かけて、街の歴史や賑わいを感じながら、見聞を広めてほしいと思います。
まじめでしっかりというのは、私が学生のときから感じていた“京女らしさ”でもあり、たいへんすばらしいことだと思います。ただ、少し控えめなところがあるのか、「質問はありますか?」への問いかけへの反応はほとんどなく、双方向でのやり取りは難しかったです。もう少し積極性があってもよいのかなとは思いました。
また、昨今、AIの急速な進化による世の中の働き方の変化について語られることが多くなってきましたが、AIに仕事を奪われないためにも、チームの中で周囲に働きかけて、主体的に役割を果たしていくことが大切です。
学生の方々とお話しをする機会を持てることは大変貴重で、私ども講師を担当するメンバーも、それぞれが楽しんでやらせてもらいました。
次の学期もよろしくお願いいたします。

寄附講義

株式会社三井住友銀行

◎講義期間：平成28年度後期（9月～1月）

◎講義テーマ：

1）持続可能な社会の実現を果たす民間金融機関の役割

2）持続可能な社会の実現のために、民間金融機関がその幅広い事業領域を活かして果たしている役割について学ぶ

◎講義の概要：

- 三井住友銀行及びそのグループ会社での事業内容を素材にしながら、民間金融機関の様々な事業の仕組みを解説するとともに、受講生自身の今後の社会生活や資産形成に必要となる知識を習得する。
- 現役の企業人として活躍している講師の考え方や京都女子大学OGの経験談を通じて、金融業務の幅広さや面白さを理解するとともに、働くことについて また、自身の今後のキャリアについて考える機会を提供する。

◎受講者数：149人（予備登録時に受講希望者が400名を超えたため、抽選を実施した。）

◆担当講師コメント（講師アンケートより抜粋）

京都女子大学での講義を行っていかがでしたか？

- 学生さんにとってあまり馴染みのない、かつ複雑な面もあるクレジットカードの講義、ということでどのような反応があるか、という若干の不安はあったが、非常に真剣にメモを取りながら話を聞いている方が多く、話がしやすかった。また、受講後の感想を読んでも、カードの仕組みやメリット・デメリットをしっかり理解されている方、また今後持つときはぜひ注意したい、といった前向きな感想を持ってくださる方が多く、講義ができてよかったと感じた。
- 以前より京都女子大学へは業界説明会等で学生には話をしていたので個人的には講義が楽しみだった。参加人数が多く、真面目にメモを取りながら聞いてもらい楽しく講義できた。118名の学生からのアンケートをもらい、証券会社の魅力、銀行と証券の違い、顧客との信頼を築くことなど分かり易く理解できたとの反応が多く嬉しく思う。女子学生にとって銀行は馴染みがあり身近に感じ易いが、証券は自分には関係ない、厳しい、難しそう、身近でないとの声が多い中、少しでも社会における証券会社の役割、仕事のやりがいを講義前よりは感じてもらえたと思う。
- 極力簡単に分かりやすく説明したつもりではあったが、それでも金融用語、証券用語に馴染みのない学生にとっては難しく感じてしまうものだと改めて感じた。今後の参考にしたい。
- 学生方が非常に真剣にメモを取りながら聞いている姿勢に関心した。質問時間内に質問しにくかった様で、授業後に質問してきてくれた方もたくさんいて、自身の将来について真剣に考えている前向きな姿勢がすばらしいと思った。

貴社・貴部での業務において、参考になるところはありましたか？

- 営業活動支援、また当社のCSR活動の一環で、全国各大学で講義、講習を行う機会があるので、今回の講義を今後に活かしていきたい。、
- SMFG7社が連携したセミナーを行うことで社内でも話題になることが多く、各社の講義を見学させていただきグループ各社の業務や取組を知ることができる大変良い機会となった。
- 本講義に参加頂いた学生からの質問が新鮮だった。この業界で長く働き当たり前に感じていることが、業界外の方から見ると疑問に感じる点が多いことを改めて感じることが出来た。今後顧客に提案する際もこちら側の常識は相手側の常識でないことを心がけ説明していく必要があると気付かされた。

◆受講生の感想（授業コメントペーパーより抜粋）

- 非常に自分の将来の参考になる授業だった。講義を受けることができてよかったと思う。（発達教育学部　3回生）
- 難しい内容もとても分かりやすい解説で頭に入ってきた。社会人となってすぐ、必要になる知識ということで、学んだことを忘れずしっかり予習したい。（生活造形学科　3回生）
- 銀行の仕事内容だけでなく、金融の知識が身につきとてもためになった。また、この講義から銀行を身近に感じることができた。お金の選択肢が増えていく中で、それぞれのメリット・デメリットを理解することの大切さを知った。（現代社会学科　3回生）
- 金融業界といわれると銀行と証券会社しか知らなかった頃にくらべ、たくさん知識が増えた。就職活動のための視野が広がったように感じる。（現代社会学科　3回生）

野村證券株式会社

◎講義期間：平成28年度後期（9月～1月）

◎講義テーマ：

証券・金融市場の基礎知識と仕組みの理解。

講義を通じて、社会・経済の動向に対する見聞を広め、今後の社会生活や資産形成の際に必要となる知識を習得する。

◎講義の概要：資本市場に求められる役割とは何か。激変する日本の資本市場の全容と投資のリスク&リターンの考え方、株式投資・債券投資・ポートフォリオ運用・外国為替相場など証券投資における重要なテーマを実務の観点から解説する。

◎受講者数：116人（予備登録時に受講希望者が400人を超えたため抽選を実施した。）

◆担当講師コメント

知識を持つ、知っているということは、人生を豊かにしてくれると考える。TV、新聞、インターネットなどメディアにも関心を持ち、社会・経済の動向に関する見聞を広め、今後の社会生活や資産形成の際に必要となる知識を習得してくれることを目標に、授業を進めた。これは、どの大学、どの学科の学生にも共通していると思うが、今までの専門分野とは違う、全く知らない分野での知識の習得であるため、時には、授業中に、難しい、とっつきにくいと感じる場面があるだろう。京都女子大学の講義では、学生たちが、熱心に聞き入り、知識を身に着けようとする熱意が伝わってきた。出席を取らないにも関わらず、出席率は、毎回の授業で大変良かったと思う。講義で習得した知識を、是非、今後の社会生活に役立てて欲しいと思っている。

◆受講生の感想（授業コメントペーパーより抜粋）

- 学部の専門ではなかったため、最初は難しく感じたが、社会に出る前に金融に関する知識をつけることができ、よかったと思う。
- 社会に出てから必要となる金融市場や証券について学ぶことでき、身近に感じることができた。
- 日本の金融市場やメカニズムについて詳しく知ることができた。就職活動にも生かせそうだ。
- ライフプランニングとマネープランについての話が印象的だった。自分のキャリアを考えるうえで、参考にしたいと思う。

◆授業補助のアルバイトを経験して

大学院現代社会研究科　博士前期課程1回生

企業の方々が、学生が関心を持ち、役立つ内容を工夫し、話してくださっているのを実感した。例えば、就職活動について、社会人になってからのライフスタイルについて、将来役立つ株式の話題など、自分の学部時代に企業の寄附講義があれば、是非、履修したかったと思う内容であった。人生の先輩、しかも企業の第一線で働かれる方々と、身近に接する機会を持て、感銘を受けた。

カードリーダーの導入、プロジェクターの使い方のマニュアル化など、来年度は、よりスムーズに補助が出来るよう環境を整え、挑みたいと思う。

◆1年間運営して（事務局より）

この寄附講義が、本学においては寄附講義への初めての試みであり、関連部署とも入念な打ち合わせを経て実施すべきであったが、決してそうとは言えない準備体制でスタートを切った。そのため、特に教室の機器（プロジェクタ）の不具合が多発し、そのたびごとの対応となり場当たり感が否めない状況であった。

実際の講義については、講師の方々が毎時間とも創意工夫された内容で臨んでくださり、学生の知的好奇心を刺激し学習意欲を大きく引き出していただけた。このことは講義後の学生からのコメントペーパーから十分伺えるものであり、講師の方々の真摯な取組姿勢は大いに勉強になった。また、講義の多様性がもたらす教育効果について考える良い機会となった。

次年度については、機器のトラブル対応や授業補助学生と関連部署との連携、授業補助業務マニュアルの充実を含め、スムーズな授業運営ができるように改善していきたい。

企業との連携活動

学生による酒造り体験

平成27年度より、本学と包括協定を締結している京都市伏見区の伝統ある酒蔵「招徳酒造」と「齊藤酒造」で学生による酒造り体験を実施している。平成28年度もそれぞれの酒蔵で実施し、伝統産業の一端を学ぶ貴重な機会とした。

【体験の概要】

招徳酒造

1645年創業の京都伏見の酒蔵。酒蔵では全国的にも珍しく女性杜氏が活躍している。

◉体験期間

Ⅰ期：平成29年2月9日(木)～11日(土)受け入れ人数3名

Ⅱ期：平成29年2月16日(木)～18日(土)受け入れ人数3名

齊藤酒造（Ⅰ期のみの受け入れ）

1895年創業の京都伏見の酒蔵。「英勲」が有名である。

◉体験期間

Ⅰ期：平成29年3月22日(水)～24日(金)受け入れ人数4名

◆酒造り体験の参加学生の感想（一部抜粋）

現代社会学部　3回生　Kさん

酒造り体験を通して、製造者のお酒への情熱と酒造りの伝統の変化という二つのことを学ぶことができました。まず、酒は米を醸造して作るのですが、その過程にはたくさんの手間暇がかけられています。製造者の「消費者により良い酒を届けたい」という思いを身近に感じることができました。次に、杜氏制度を採用していない酒蔵も多く、杜氏がいなくても機械化でそれをまかなうことができると知りました。そのような中、杜氏と直接話をすることができたのは貴重な経験になりました。

現代社会学部　3回生　Tさん

酒造りを体験させて頂き、職人さんの仕事は、いかに素早く丁寧で細かい作業ということがわかりました。特に、切返しや中仕込み、留仕込みの工程は力仕事で根気のいる作業でした。しかし、搾りたてのお酒を飲ませていただいた時、お酒が出来るまでの過程を体験してきたので、職人さんのお酒に対する強い思いやこだわりを感じることができました。その味は、とてもまろやかでおいしいものでした。普段生活していたらなかなか体験させていただけない事なので、貴重な体験になりました。

文学部　3回生　Tさん

見学と体験を通して、おいしい日本酒ができるまでには繊細な製造過程と品質管理がとても重要だということを知りました。日本酒が造られていく過程を直接体験して知ることで日本酒の製造や業界に関心を持つことができて、より日本酒を好きになることができた充実した3日間でした。

家政学部　3回生　Mさん

作業工程を見ていると、社員の方同士が協力していらっしゃる姿に刺激を受けました。一つひとつの作業に懸命に取り組んでいらっしゃることが伝わってきて、自分も懸命に取り組まなければという意識が芽生えました。また、作業に加えていただいて実際に体験したことで作業の大変さを実感する事が出来ました。体験してみるとお米をほぐす作業や、仕込みで合わせる作業、お米を運ぶ作業など体力がいるのだなと感じる事が多かったです。その分、社員の方が丁寧かつ円滑に作業している姿が印象的でした。

文学部　3回生　Nさん

2月は酒造りシーズン真っ盛りということもあり、この時期しか見られない・できない貴重な経験をさせていただきました。蒸米に麹菌を繁殖させる過程や、仕込みといって大きなタンクで米や水をかき混ぜる作業では、従業員の方々の体力に驚くばかりでした。

また、招徳酒造を支える女性杜氏・大塚さんが男性従業員の方々と肩を並べ、真剣に酒造りに挑む姿はとてもかっこよく、同じ女性としてとても勇気づけられました。

日本酒の消費は年々減り続けていますが、私達の若い世代が日本酒業界を盛り上げなくてはいけないと考えさせられた3日間でした。

行政との連携活動

京都刑務所

京都女子大学と京都刑務所は、それぞれの持つ人材や知識、情報などの資源を活用し、人材育成に寄与することを目的に、平成28年7月27日付で連携・協力に関する協定を締結した。連携内容としては、①受刑者ではなく、刑務官を対象とした講習②刑務所内の作業所で作られる木工製品のデザインの提案③刑務所職員によるリレー講義の提供④矯正展への出店等である。なお、刑務官を対象とした講習については、本学音楽教育学専攻の教員による講習「自己をコントロールするための呼吸法」を5月より定期的に実施している。

また、平成29年度より寄附講義として地域連携科目「京都の社会と連携活動」のリレー講義の中で「京都刑務所における受刑者の実情と社会に貢献する刑務官の姿」について刑務官による講義が提供される。

LINEニュースアクセス数で国内トップに
（平成28年10月6日）

刑務所と女子大の異例の協定に、各メディアからの反響が大きかった

京都女子大
刑務所

異例の協定

学生・受刑者 ともに実社会の接点に

協定書を交わした京都女子大の林忠行学長（左）と京都刑務所の山本孝志所長＝東山区

女子大と刑務所、異例の組み合わせの包括連携が結ばれた。学生たちは、刑務官から刑務所の実態などを教えてもらう。一方で、刑務所内の作業所で作られる木製おもちゃなどのデザインを提案。学生にとっても受刑者にとっても、実社会と接点を持つ貴重な機会になりそうだ。

5日に協定書を交わしたのは、京都女子大（東山区）と京都刑務所（山科区）。同刑務所によると、国内の刑務所が大学と、こうした協定を結ぶのは聞いたことがないという。林忠行学長は「刑務所は社会の重要な部分を代表している側面もあり、学ぶことは少なくない」と狙いを語る。

きっかけは、京女大の竹安栄子・地域連携研究センター長と同刑務所の山本孝志所長が3月にある会合で同席したこと。実社会について学ぶ機会を求める大学と、社会との結びつきを重視し始めた刑務所。狙いが一致し、協力に向けて議論が始まった。

5月には発達教育学部教育学科のガハブカ奈美教授が刑務所を訪れ、約100人の刑務官に「自己をコントロールするための呼吸法」と題した講習会を開催。受刑者同士のけんかや自殺の予防など強い緊張感の中で働く刑務官が、アクシデントに遭っても心や身体をコントロールする呼吸法を伝授した。山本所長は「刑務官が落ち着いたので、受刑者も落ち着くようになった」と効果を語る。

今月22、23日には、同学部児童学科の矢野真教授のゼミ生が刑務所である矯正展に参加し、箸作りなど工作に関するワークショップも開く予定だ。今年度中には、受刑者が作る木製おもちゃなどのデザインも提案することになっている。

来年度からは全学部を対象にした地域連携科目の中で、刑務官に刑務所の実情などを講義してもらう予定だ。竹安センター長は「京都の歴史や文化に興味を持って入学する学生が多いなか、京都の現実の社会も学んでほしい」と話す。（小林正典）

朝日新聞　2016年10月6日朝刊　29面（京都市内版）に掲載されました

受刑者の社会復帰促進

京女大、京都刑務所と協定

受刑者の復帰しやすい社会にするため、京都女子大（京都市東山区）と京都刑務所（山科区）は5日、連携協定の締結式を同大学で行った。作業所で作る木工品のデザインを学生が提案するなど、受刑者と社会の接点を作りつつ学生の教育にもつなげる。法務省は、ほかに刑務所と大学の協定は知らない。全国的に珍しい取り組み」とする。

協定に基づき、大学教員が刑務官向けに「自己コントロールのための呼吸法」の講義を実施する。5月に先行して行った時には「緊張感の絶えない職務に応用できる」と好評だったという。10月22、23日には、同刑務所での矯正展に学生が初めて出展しワークショップを開催する。また学生が子ども向けおもちゃのデザインを受刑者に提案するほか、刑務官による学生への講義も計画している。

地域の会議で知り合った同刑務所の山本孝志所長と同大学の竹安栄子・地域連携研究センター長が4月から協議を進めてきた。締結式で山本所長は「異色の組み合わせから新しい力を生み出したい」、林忠行学長は「最初聞いた時は驚いたが、今後も連携を深めたい」と話した。（広瀬一隆）

京都新聞　2016年10月6日朝刊　24面（社会）に掲載されました

京都女子大と京都刑務所 連携

刑務官が講義 ■ 学生が作業製品作り協力

京都女子大（京都市）は5日、京都刑務所（同）と連携協定を締結したと発表した。教員と刑務官を相互に派遣して学生や刑務官に講義するほか、学生が刑務所作業製品作りに協力する。法務省によると、大学と刑務所の連携協定は珍しい。

受刑者の社会復帰支援の一環として、京都刑務所が連携を打診。大学側は「学生が社会の多様性を学ぶ機会になる」と判断した。

協定は今年7月に締結し、これまでに、大学教員が刑務官に平常心を保つ呼吸法などを講義した。来年度は、高齢化が進む受刑者の現状などについて刑務官が学生に講義するほか、発達教育専攻の学生が受刑者が作る木製玩具のデザインを考案することを計画している。

将来は、大学教員の受刑者への講義や、学生の慰問なども検討する。京都刑務所の山本孝志所長は「刑務所への理解を深め、受刑者の社会復帰を支えてくれる人が増えてくれれば」と話している。

読売新聞　2016年10月6日朝刊　30面（社会）に掲載されました

「京女＝福堂*方式」京都女子大学と京都刑務所による受刑者の更生支援方式

京都刑務所所長　山本 孝志
地域連携研究センター長　竹安 栄子

『平成27年版犯罪白書』（法務省）によると、わが国の犯罪発生率は2002（平成14）年をピークに2003（平成15）年から減少を続けているが、再犯者率は1997（平成9）年から一貫して上昇し続け、2014（平成26）年には47.1％に達している。特に高齢者の再犯者割合は高い傾向にある。このような状況を考慮すると、受刑者の更生と出所後の社会復帰を支援すること、また出所した元受刑者を社会が受容する土壌を涵養することが、犯罪を減らし、安心・安全な社会を築くにあたって重要である。

京都女子大学は、以上のような観点に立って、受刑者の更生と社会復帰を支援することを目的として京都刑務所との連携活動を展開するとともに、大学教育において学生が犯罪の背景にある社会の問題に理解を深めることを目的として京都刑務所との包括協定の締結を企画した。

また京都刑務所においては、今回の京都女子大学との包括協定締結協議をきっかけに、個々の刑務官が持つスキルを活用し、積極的に地域社会に貢献する活動を行うことによって受刑者の社会復帰の道筋をつける目的で、2016年9月に「報恩福堂プロジェクト」を立ち上げた。京都刑務所ではかねてより地元である京都市山科区との良好な関係の構築をめざし、山科区内に居住する刑務官が中心となって、地域の役員や消防団員、PTA役員などの諸役員を務めるなど積極的に地域に溶け込む努力を続けてきた。「報恩福堂プロジェクト」は、これまでの活動の目的を明確化し、地域貢献に組織的に取り組むことを意図している。

京都女子大学と京都刑務所の意図が以上のように一致したことにより、2016年10月5日、京都女子大学で包括協定調印式を開催するに至った。

本協定に基づいて、京都女子大学と京都刑務所は「京女＝福堂方式」と名付けた以下の方針に基づいて今後様々な連携活動を展開する予定である。

1．刑務所運営支援＝刑務官を中心とした連携活動

これまで刑務所への支援活動が広がりを見せなかった要因として、受刑者の人権保護と支援活動の両立が困難であるという状況が考えられる。すなわち、人権保護の観点から受刑者への接触は特定の有資格者に制限されているため、受刑者を対象とした支援活動は極めて限定的にならざるを得ない。このことが刑務所の社会的孤立を生み出していた要因の一つであると考えられる。そこで本方式では、日々受刑者に接している刑務官の活動を支援することを第1の目的に据えた。

刑務官と大学の間であれば、より柔軟でかつ多角的な連携活動が可能となる。また諸手続きを簡略化することが出来るためタイムリーでスピーディな活動を行うこともできる。このような連携活動から、地域社会と刑務所の間にこれまでにない深い信頼関係が醸成され、刑務所に対する社会の理解が一層深まると考えられる。その結果として、受刑者自身が更生に向けてポジティブに取り組むようになるという効果が期待される。この考え方に立てば、広範囲の市民がそれぞれの専門を生かして多様な方法で刑務所を支援することが可能となる。

2．大学における教育的意義

京都女子大学の連携活動の重要な視点は、大学と連携先が「Win Winの関係」に立つことにある。一方的な「支援」ではなく、「支援」する側も学習し、社会の現実についての理解を深めるところに連携活動の意義を見出している。弱者に寛容な社会、あるいは真の意味での安心・安全な社会の構築をめざして、京都刑務所との連携活動を通して学生が市民としての役割を学ぶことは教育的に意義深いと考える。

備考 ： ＊「福堂」とは、吉田寅次郎（松陰）が野山獄中で書き上げた「福堂策」に依る。その意図するところは、「人は愚賢の差こそあれ、優れた才能の一つや二つはある。それを延ばせば、必ずその人なりに立派な人物となる。これこそが人を見捨てず大切にするための要術である。」（『福堂策　上』）。

京都刑務所～児童学科矢野ゼミによる連携～

矯正展

京都刑務所での「第39回京都矯正展」（平成28年10月22日・23日）に本学児童学科矢野ゼミ生16名が参加した。木工のワークショップを初出展し、木製の箸の作り方や、身近な材料を用いた工作を参加者に指導した。

参加したゼミ生は「刑務所に対して抱いていた暗い印象が変わった。受刑者の社会復帰に部分的にでも役に立つことができたら嬉しい。」等と話していた。

京都刑務所主催の矯正展でワークショップの出展
（児童学科矢野ゼミで「おはしづくり」「身近な材料を使っての工作」）

木工製品デザインの提案

京都刑務所との連携協定にもとづいた連携活動の一環として、本学児童学科矢野先生のゼミ生が刑務所内の作業所で作られる木製おもちゃなどのデザインを提案する事となった。

平成29年2月15日には、本学でKBS京都の番組「newsフェイス」の取材が行われた。京都刑務所の職員も来校され、矢野先生とゼミ生たちがどのような活動をすすめていくかデザイン案をもとに説明した。

本学でのKBS京都「newsフェイス」取材

京都矯正展ポスター

京日記

◇全国の刑務所に収監中の受刑者の作品を展示販売する「第39回京都矯正展」が22日、京都市山科区の京都刑務所で始まった＝写真。家具や紙製品など多彩な品々が集められ、市民が買い求めた。

◇京都刑務所などが年1回催している。今回は滋賀や大阪を含めた9刑務所が会場にブースを設け、受刑者が更生作業で手がけた約5500点を並べた。

◇京都刑務所職員らが売り場に立ち、折り紙やメモ帳を売り込んだ。同刑務所と連携協定を結んだ京都女子大（東山区）の学生も箸作り体験を催し、子どもを楽しませた。23日まで。入場無料。（日山正紀）

京都新聞　2016年10月23日朝刊　29面（社会）

京都女子大学矢野ゼミによる活動が、各紙で取りあげられた。

受刑者社会復帰に一役

京都女子大 矯正展に初出展

京都刑務所（京都市山科区）で23日、「第39回京都矯正展」が開かれた。刑務所と包括連携協定を結んだばかりの京都女子大（東山区）の学生らも木工のワークショップを初出展し、受刑者の社会復帰に向けた取り組みについて理解を深めた。

学生ら木製箸の作り方伝授

矯正展は22、23日の2日間で、京都刑務所を含む全国の9施設が手がけた家具や小物など約5500点が並び、地域の住民たちでにぎわった。京都女子大からはこの日、児童学科の学生11人が来場者に木製の箸の作り方を伝授した。参加者はヒノキやキハダなどの木材をかんなで削った後、やすりをかけて箸の形に整えた。山科区に住む小学1年の福井雅乃さん（6）は「おもしろかった。家で使いたい」と喜んでいた。

児童学科3年の川上鷹乃さん（20）は「刑務所に対して抱いていた暗い印象が変わった。受刑者の社会復帰に部分的にでも役に立つことができたらうれしい」と話した。

今後、児童学科では受刑者が作る木工品のおもちゃのデザインに携わる予定で、川上さんは「カスタネットなど可愛いおもちゃができたらいい」と話した。

【宮川佐知子】

木材をかんなで削る参加者と京都女子大の学生＝山科区で

毎日新聞　2016年10月24日朝刊　28面（京都）

◆京都刑務所への封筒印刷を依頼

京都刑務所作業所に、京都女子大学地域連携研究センターの封筒を印刷依頼した。

～音楽教育学専攻 ガハプカ先生による連携～

「自己をコントロールするための呼吸法」

発達教育学部　教育学科　音楽教育学専攻
ガハプカ奈美

本活動は、日々大きなストレスにさらされる刑務官に対して、「自己をコントロールするための呼吸法」と題し、いかなる場面に遭遇しても平常心が保て、自己の能力を最大限に出せる能力開発のために始めたものである。

内容には、呼吸法の8つの流れ「気づく」呼吸を通して自分の無意識に気づく、「認める」自分の存在を認める、「活かす」リズム呼吸で身体との連動の体感、「共感する」他者の呼吸を知って感じる、「高める」ストレッチで自己修正する、「つながる」これまでの呼吸を行為と合わせる、「深める」呼吸を視覚化する、「与える」普段の実践を用いた。

まずは、簡単なエクササイズを用いて、「気づく」エクササイズから始め、「与える」エクササイズへとつないでいった。刑務官たちは、簡単にリラックスできて、尚且つ、気持ち（気分）もすっきりする感覚を得たようであった。また同時に、自分が無意識に抱えている「ストレス」にも気がつくことが出来た。

その後も継続して全体講習や、刑務官の武道トレーニングの場へ出かけ、一人ひとりの呼吸の変化を観察しながら新たなエクササイズを考案し提案をしている。

武道もそうだが、刑務官という仕事は、ほんの一瞬の気のゆるみが大きなけがへつながってしまったり、負の力を呼び寄せてしまったりしないように咄嗟の判断を強いられることが多い。

通常時から「呼吸法」を身につけ、「呼吸、呼吸」と考えずともリラックスした状態に自分を置いておくことが大切である。

我々人間は生きていきやすいように体はその機能を整えている。「呼吸法」を身につけることで、生まれ持った人としての自然な力を自分の身体に呼び戻し、今生きている「私」を十分に活かすことが出来ると考えている。そうすれば一人ひとりの存在そのものが、呼吸法の8つの流れの最終目標である「与える」ことにつながっていくのである。

呼吸法を受講した刑務官が「全国矯正職員剣道選手権大会」で優勝したと嬉しい報告を受けた。

左：京都刑務所山本所長
右: 本学竹安地域連携研究センター長
優勝旗の前で

その他行政との連携活動

京都府警察

◉交通安全ポスター

本学と京都府警察は、「交通安全にかかる連携・協力に関する協定」を締結している。この協定にもとづき、本学の学生に対し、自転車の安全運転を呼び掛けるポスターデザインの公募を行った。4回生、矢野美那子さんのポスターが採用され、警察署や市バスに掲示された。

◉東山警察署

交通安全啓発イベント（洛東園デイサービスセンター）
平成28年12月15日実施

東山警察署からの依頼により、本学発達教育学部教育学科音楽教育学専攻ガハプカ奈美教授とゼミ生が、洛東園デイサービスの利用者を対象に、交通安全啓発イベントに参加した。

呼吸法のエクササイズ指導や歌の披露のほか、「交通安全宣言」を読み上げ、会場で交通安全への意識を高めた。

京都市中央卸売市場

本学と京都市中央卸売市場は、市場・地域の活性化および食育の推進をめざして包括連携協定を結んでいる。協定にもとづき、平成28年度は以下のイベントに本学の食物栄養学科中山ゼミが参加した。

全てのイベントには、幅広い年代の方が来場し、食文化への関心を持つ良い機会となった。学生も、地域の方と接することで、貴重な体験となった。

◉「京の食育ワンダーランド」平成28年10月9日実施

①「Tasting time！　食べた魚は何だろう?」

参加者に市場ならではの魚を食べ比べていただき、それぞれの栄養情報等を学生が講義した。

②「実験！発見！野菜チップス」

学生による菓子に含まれている油の量を調べる実験と野菜を使ったおやつの紹介。

③「これであなたも魚・野菜・果物博士!」

魚・野菜・果物についての展示・クイズを実施した。

④「わかるかな? UMAMIのちがい」

和食に欠かせないだし（うまみ）の良さとだしの種類とうまみの違い、相乗効果、低塩効果について学生が講義した。

◉「鍋まつり」平成28年11月23日実施

京都市中央卸売市場では、栄養バランスに優れ、みんなで楽しむことのできる「鍋」をキーワードに、市場の食材をたっぷり使った鍋料理の販売や食育の推進を目的として、平成15年度より「鍋まつり」を開催している。

平成28年度は、食物栄養学科中山ゼミが「京仕立　甘鯛にゅうめん」を企画・調理し、参加した。来場者にたいへん好評で、販売開始まもなく完売となった。

地域との連携活動

児童学科松崎ゼミによる連携

京都女子大学人形劇団たんぽぽ

京都女子大学人形劇団たんぽぽは、児童学科松崎ゼミの学生が中心になって組織している人形劇団である。今年度は4回生11名、3回生9名の計20名で、学内外において計25回の活動を行った。

①人形劇の学外公演

- 幼稚園、保育園や児童館など、保育現場におけるお楽しみ会等での上演。
- 児童館の乳幼児クラブや京都市子育て支援総合センターこどもみらい館、また保育園の園庭開放など、子育て支援事業での上演。
- 自治会の夏祭りでの上演。
- 「いいだ人形劇フェスタ2016」に参加し、他劇団や観客との交流および人形劇の見識を深めることを目的に、高齢者劇団とのコラボ上演、「初めて出会う人形劇」企画など4回の上演。

②学まちコラボ事業「親子で楽しむ人形劇のひろば」の実施

京都市の学まちコラボ事業に採択され、京都市新道児童館にて9月～10月にかけ5回実施。保護者同士の交流の活性化、保護者の遊ぶ力の育成をめざし、人形劇の上演およびワークショップを実施した。

③児童養護施設との交流活動

社会福祉法人平安徳義会ミニ徳ホームとの継続的な交流活動として、4月の花植え、5月の人形劇上演、11月の遠足に参加。

④学内開催の地域連携活動

- 京都女子大学人形劇フェスティバル2016（児童学科主催：7月23･24日）にて、人形劇の上演および「人形を作って遊ぼうコーナー」の企画運営。
- 藤花祭に開催する「こどもひろば」（児童学科主催）にて人形劇を上演。

深江幼稚園の
園庭開放での上演の様子

本学藤花祭の
こどもひろばでの
上演の様子

こどもみらい館の
みらいっこまつりでの上演を終えて、
子どもたちとの交流の様子

2016年度 京都女子大学人形劇団たんぽぽの地域連携活動を通して

発達教育学部　児童学科　准教授
松崎 行代

人形劇団たんぽぽは、上演活動の際、毎回、舞台の様子をビデオ撮影しています。撮影した映像は、演技の反省とともに、観客である子どもたちの笑い声やつぶやきといった反応から、子どもの発達と作品理解の分析に役立てています。学生たちは、地域連携活動によって体験的な学習の場を得て、「練習・上演・反省と分析」を繰り返し、人形劇の演技力向上とともに、子どもにとっての人形劇の価値や人形劇の特性と子どもの発達についての見解を深めています。特に今年度は、ここ数年、子育て支援での上演活動が増加するなか課題となっていた、3歳未満の乳幼児を観劇対象とした人形劇作品の制作・上演に取組み、3歳未満の子どもたちにとっての人形劇の意義について考えることができました。

また、学生たちは、年間20回を越える活動を通し、地域社会における人形劇活用の多様性について知るとともに、様々な人と出会い繋がる喜びを味わうことができました。そのような経験を通し、子どもだけに向けられていた学生たちの関心は、子どもと一緒に観劇する家族や、上演会を企画しその運営に汗して取り組む自治会や保護者会の大人たち、また、子どもたちを楽しませたいと劇団を結成し上演活動に取り組む地域の高齢者といった、児童文化活動に取り組む人々、そして、そういった人々によって展開される活動の意義や内容にも関心の目が向けられるようになっていきました。子どもが生活する地域社会や、そこで子どもたちに関わる多くの人々の存在、その人たちが展開する児童文化活動について、その実態を把握できたことは、児童学科の学生にとって重要な学習の場だったと言えます。そして、自分たちも、子どもを取り巻く環境の一部として地域に在ることを自覚できたことは、大学での学びへのより積極的な姿勢をつくり出したと思われます。

なお、本年度は例年以上に、昨年度に引き続いての上演依頼が多くありました。人形劇の内容や評価も大事な観点ではありますが、依頼者との事前の連絡や当日の対応といった学生の姿も大きく影響しているようです。地域の人々とつながる活動を通し、学生はコミュニケーション力を着実に育てたと考えられます。また、本年度京都市の学まちコラボに採択され実施した「親子で楽しむ人形劇のひろば」の活動を通し、継続的な活動によって可能となる子どもや保護者の実態に合わせた活動展開の醍醐味も味わい、次年度以降の地域連携活動を考える新たな視点が設定できたようです。

親子で楽しむ
人形劇のひろばの様子

地域との連携活動

市民とともに、まちづくり活動

元吉町　町内会　祇園新橋まちづくり部（祇園新橋　景観づくり協議会）

「祇園新橋の風情をこれからも守る」ために立ち上げられた「元吉町　町内会　祇園新橋まちづくり部」の会合に、NPO法人京都景観フォーラムとの連携包括協定を結んだことをきっかけに、参加を始めた。

この会合では「祇園新橋景観づくり協議会」発足に向けて、準備が進められてきたが、3月18日（土）に、第1回「祇園新橋景観づくり協議会」設立総会が、開かれるに至った。

地域の景観保全のうえで課題となっている写真の前撮り業者への聞き取り調査を、本学が中心となり行い、この聞き取り調査をもとに、従来からの地域住民と前撮り業者のように新しく店舗を構える店舗が、互いに、いかに祇園新橋の景観を保全し、共有するか、その方向性を探っていく予定である。定例会への参加や、地元イベントの手伝いなどを行ってきたが、「祇園新橋景観づくり協議会」の発足に伴い、今後はさらに祇園新橋の景観の風情や文化を守る活動へと発展させていく予定である。

祇園新橋の風情守りたい

観光マナー改善など呼び掛け

景観づくり協議会 住民ら立ち上げ

2017年3月18日
京都新聞で活動が取り上げられた

祇園新橋で、古くから伝わる行事、お火焚きまつりでは、のぼりの設営などを手伝った

東山南部地域活性化委員会

五条坂から東福寺に至る地域の観光資源開発、地域での緊密な連携、共同でのイベントや催事の開催、地域をアピールできる情報発信など、国内外の来訪者が、安心安全に観光を楽しめ、リピートしたいと思う魅力ある街づくりをめざし、平成19年度にハイアットリージェンシーが事務局となり、委員会が発足した。地域活性化に関する意見交換の場として定例会議が開催されている。本学は、この会議に、発足当初から参加を継続している。

また、委員会が中心となり執り行う「太閤まつり」は、今年3回目を迎え、本学学生が、お茶席の開催や、能の披露を行った。会期中に、出される仮設テントには、生活デザイン研究所副所長の出井先生と学生たちが出店し、自分たちがデザインしたカルシウムサプリメントやぽち袋、ステーショナリー類やトートバッグなどのファッション関連商品の販売を行った。

太閤まつり模擬店コーナー

模擬店コーナーでの京都女子大学のブース

弥栄自治連合会
（すこやか学級）

「健康づくりのための呼吸法」

発達教育学部　教育学科　音楽教育学専攻
ガハプカ奈美

本活動は、平成28年12月から東山弥栄学区「居場所づくり」ふれあい・健康づくり地域連携活動として学区民生委員からの依頼により開始された。

活動の目的は、弥栄学区内の中・高齢者を対象に実施されている「居場所づくり」活動へ出向き、利用者と交流を図るとともに「健康づくりのための呼吸法」の実践を呼びかけることである。

実施内容は大学院生の実践研修の場にも有効と考え、授業で行っている内容に「かんたん・きもちいい・つづけられる」を第一に考え、新たに考案した簡単に取り組めるエクササイズを提供することとした。

第1回目は「呼吸法」が初めてである利用者がほとんどだと考え、次の会までのチェック表を宿題とし、毎日意識をしてエクササイズに取り組めるようにした。第2回目に任意で回収したが、思った以上にきちんと取り組んでおられたのが印象に残った。簡単なエクササイズだからこそ毎日の習慣にしてほしいと考えている。そうすることによって自分では気がつかないうちに、「つまづきにくい」、「気がつくとエスカレーターでなく階段を使っていた」、「少し遠くへ旅行に行きたくなった」など年齢のせいにして本当に「やりたい事」をしていなかった自分にふと気がつくことがあるであろう。また同時に対象者世代と大学院生世代の交流の場を持つことによって、これまで全く知らなかった方々といかにコミュニケーションを取り、大学院生は、自分たちが学んでいることをどのように具体化していくか考える良いきっかけともなり、大学院を修了したのちに各々の地域でも活動ができるのだという自信にもつながった。

人の感性は年を重ねるほどその経験を活かして豊かになる。だからこそ良い呼吸をして感性を更に研ぎ澄ませて自分らしく健康でありたい。一人ひとりが人生の主人公であり続けるために、呼吸を通してもう一度「素敵な自分」と出会ってほしい。

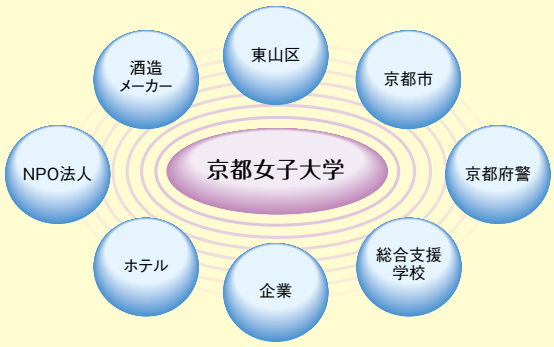
「年だから」と自分をあきらめず「年をとったから出来る」ことを増やして笑顔で健康に自分らしい時間を過ごせるよう、今後も「かんたん・きもちいい・つづけられる」を第一に小さな活動であるが、続けていきたい。

京女ネットワーク協議会
（通称:京女ラウンドテーブル）

本学が核となって、多様な連携先が一同に会し、地域課題の共有化をはかることを目的に、「京女ラウンドテーブル」を組織した。

異業種・異分野間で、情報交換し、新たな連携活動が展開されることが期待できる。第1回目となるラウンドテーブル会議では、本学が取り組む検討課題の一つである「地域防災」を取り上げ、京都刑務所からは、2016年11月に京都刑務所が実施した避難所訓練の経験について情報提供を受けることができた。この会議への出席機関からは、新しい視点を学ぶことができたとの感想が寄せられている。

■ラウンドテーブル概念図



第1回　ラウンドテーブル会議

◎**開催日時**：平成29年2月22日（水）13時～14時30分

◎**開催場所**：京都女子大学A校舎5階会議室

◎**次　　第**：

①**開会**　事務局より出席者紹介

②**開会挨拶**（林 忠行学長より挨拶）

③**「京女ラウンドテーブル」の主旨説明**

（竹安 栄子地域連携研究センター長）

④**出席者の自己紹介、連携活動に関する情報交換**

⑤**本学の防災に関する地域連携について**

（吉川 大栄総務部長）

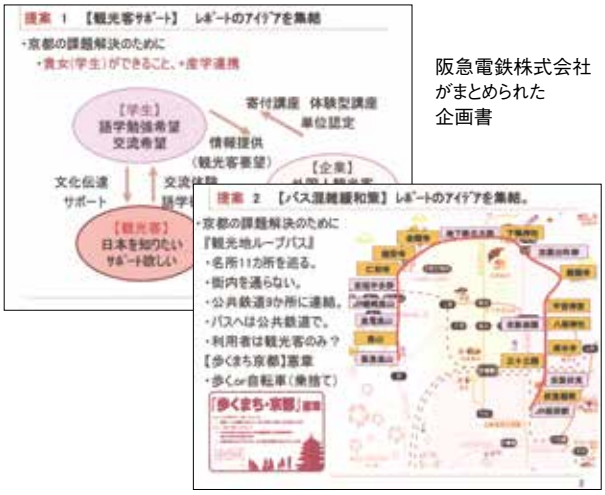
⑥**本学の教育課程についての要望、意見など聴取**

⑦**閉会**

◎**参加企業・官公庁・団体**

・株式会社三井住友銀行
・阪急電鉄株式会社
・株式会社京都銀行
・東山区役所
・京都刑務所
・京都市中央卸売市場
・NPO法人京都景観フォーラム
・ハイアットリージェンシー京都　　合計8機関15名

阪急電鉄株式会社からは、寄附講義を受講した本学学生のレポートのアイデアを集結して企画した「観光客サポート」と「バス混雑緩和策」の提案が発表された。企業と学生が共同で企画した、地域に貢献する提案となることが期待される。



阪急電鉄株式会社がまとめられた企画書

会議風景

林忠行学長の開会挨拶

和やかな雰囲気で、情報交換が行われた

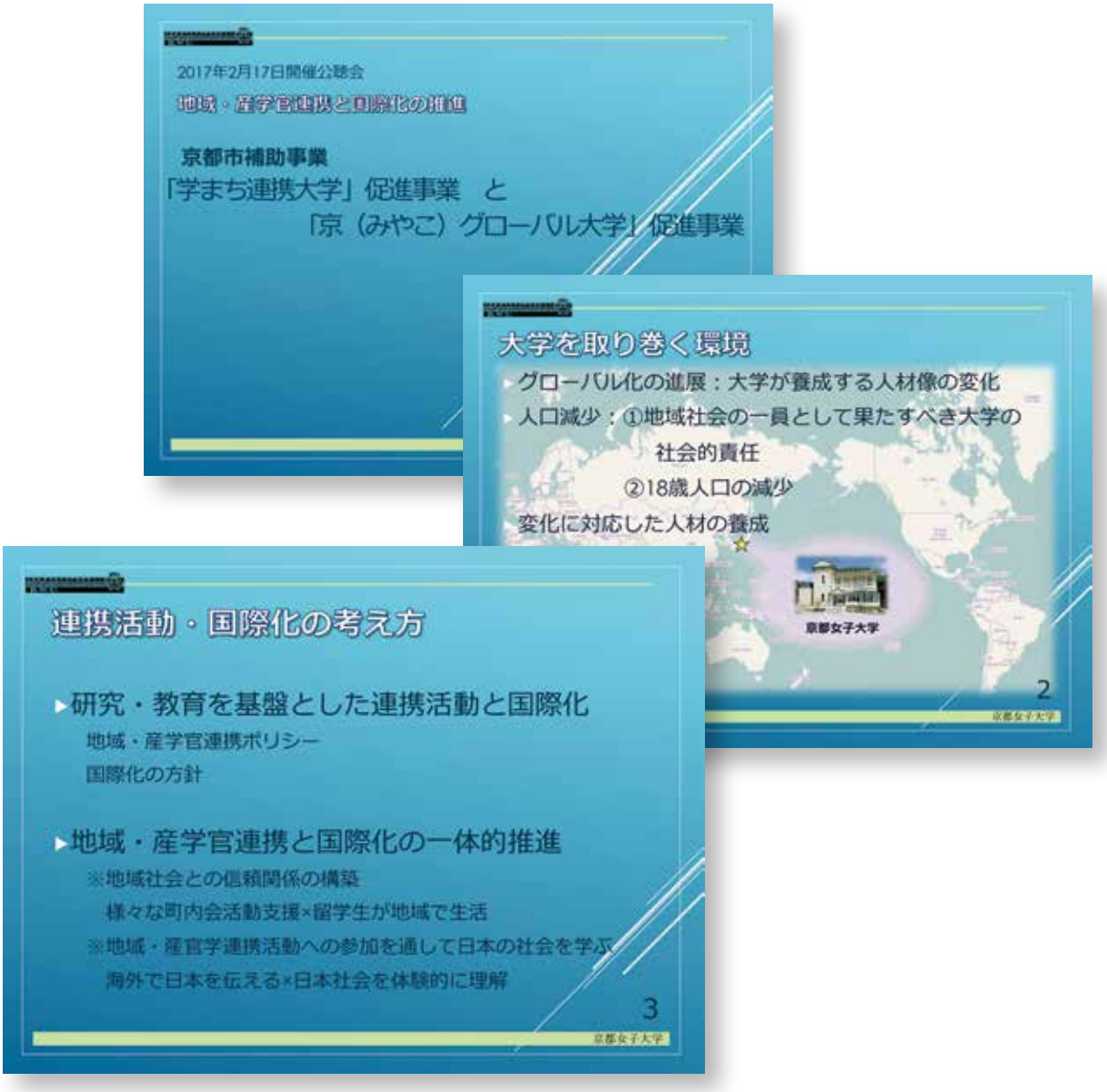
Ⅱ 京都市「学まち連携大学」促進事業と「京(みやこ)グローバル大学」促進事業の学内説明会(公聴会)

「学まち連携大学」促進事業の主旨を、学内の教職員が共有し、全学体制で推進することをめざして2017年2月17日に事業内容の説明会を開催した。本説明会では、地域連携と国際化を一体的に推進するという考えに立って、同じく2016年に採択された京都市「京(みやこ)グローバル大学」促進事業についても説明がなされた。

◎**開催日時**：平成29年2月17日(金)10:00～11:10
◎**開催場所**：京都女子大学　C501講義室
◎**出席者数**：164名(教職員全体の65.6%が参加)

公聴会の様子

公聴会資料



Ⅲ 大学との連携活動
奈良女子大学

奈良女子大学と包括交流協定を締結

本学と、奈良女子大学は、両大学の持つ強みや特色をいかし、相互に連携協力するために、平成28年9月23日に包括交流協定を締結した。主な連携事項は、

1. 社会をリードする女性人材の育成に関すること
2. 学生及び大学院生の交流に関すること
3. 学生及び大学院生の単位互換に関すること
4. 共同研究開発に関すること
5. 学術上の知識及び情報の交換に関すること
6. ファカルティ・ディベロップメント及びスタッフ・ディベロップメントの取組みなど、教職員の交流に関すること
7. 社会貢献事業の実施に関すること　と設定されている。

協定締結式は、奈良女子大学で、平成28年9月23日（金）15時半から執り行われた。

多くの世界遺産を持つ都市に存在する女子大学同士、関西で明治時代以来、女性教育を担ってきた歴史ある女子大学同士が連携することで、女子大学の存在を社会にアピールし、これからの女性教育の発展、女性リーダーの育成に大きな成果をあげる役割を果たすことが期待されている。また、国立大、私立大の枠組みを超えた包括交流協定は、類をみない事例として、注目を集めた。

協定締結式

特色生かし相互発展
奈女大と京女大が連携協定
国立と私立の枠超え

奈良新聞
2016年9月24日
新聞メディアで、両大学の包括交流協定について、報じられた

京都女子大学×奈良女子大学 合同シンポジウム

本学と奈良女子大学との「包括交流協定」締結後、第一回「女子大学の未来　地域社会とともに歩む女子大学」と題した合同シンポジウムが、平成29年3月13日に開催された。

シンポジウムは、3月3日に竣工した京都女子大学新図書館での初のイベントでもあり、京都女子大学新図書館竣工記念となった。シンポジウムは、両大学の地域連携への取組み事例の紹介を中心に行われ、両大学の関係者に加え、連携協定先官公庁、企業、地域の方々にもご参加いただき、有意義な情報交換の場となった。

奈良女子大学
今岡春樹 学長 挨拶

開催日時：平成29年3月13日（月）14:00～16:30
場　　所：京都女子大学新図書館
（交流の床1Fホール）
出 席 者：約60名
講　　演：「京都女子大学の連携活動」

1. 京都女子大学　地域連携研究センター長
竹安 栄子
2. 京都刑務所所長
山本 孝志
3. 京都女子大学 発達教育学部 教授
ガハプカ 奈美
4. NPO法人 京都景観フォーラム 専務理事
森川 宏剛
5. 京都女子大学 家政学部 准教授
井上 えり子

講　　演：「奈良県の地方創生に向けた大学と行政の連携」

6. 奈良女子大学副学長（地域創生担当）、やまと共創郷育センター長
藤原 素子
7. 奈良女子大学教務補佐、よしの農林業週末塾代表、ゲストハウスApricot運営、ヨガインストラクター
秋谷 奈美

合同シンポジウム

講演：「京都女子大学の連携活動」

1. 竹安 栄子 京都女子大学地域連携研究センター長

最初に、シンポジウムの主旨についての説明が竹安栄子地域連携研究センター長から行われた。日本は、2015年時点、GGP（ジェンダーギャップ指数）が、世界145か国中101位であり、経済分野、政治分野での女性参画の遅れがあるという現状をデータで示し、今、まさに女性人材の育成が求められていることを実感できる内容であった。その後本学の今までの連携活動の概略、本学の特色ある科目、連携指向型教育プログラム「地域系女子養成プログラム」の説明、本学が核となって連携先が一同に会し、地域課題の共有化を図るために組織された「京女ラウンドテーブル」の紹介などがあった。

2. 京都刑務所 山本 孝志 所長

京都刑務所の概況や刑務所と女子大との異色の包括連携協定が大変な話題となり、思いもよらぬ展開、イノベーションにつながったとの説明があった。女子大から直接受刑者とコミュニケーションすることはハードルが高いが、職員との連携を行うことで、職員のスキルアップがはかれ、それが受刑者に還元されていくという循環を生んでいるとのことだ。また、職員との連携は、時間、場所に制約はなく柔軟な展開が可能となっている。具体的な本学との事例として、ガハプカ奈美教授による呼吸法、矢野ゼミによる木工デザインの提案、矯正展への学生参加が発表され、いずれも好評で、成果がみられると評価いただいた。また「社会と共存する刑務所をめざす」というスローガンで取り組まれた全国初の、刑務所を避難所として想定した総合防災訓練についても紹介され、参加者一同が、たいへん興味深く聞き入った。

3. 京都女子大学 発達教育学部 ガハプカ奈美 教授 「呼吸法を用いた連携活動」～自分らしくあるために～

本学、ガハプカ奈美教授からは、呼吸法を知ってストレス社会における自分の居場所を確認する、呼吸法を身につけ多様な変化に対応できる自己を確立する、という2つの活動目標について説明がされた。また、ヨハネス・イッテンの造形教育カリキュラムにおける身体運動、呼吸法や発声法の取り入れについての説明や、ドイツのイルゼ・ミッテンドルフの研究に取り組まれているなど「呼吸法」についての解説もされ、参加者は、関心を持って聞き入った。実際の連携活動事例として、京都刑務所での「自己をコントロールするための呼吸法」、弥栄自治連合会すこやか学級での「健康のための呼吸法」について触れられ、「呼吸法」を受講した連携先の方々から、好評な様子が伺えた。

4. NPO法人京都景観フォーラム 森川宏剛 専務理事 京都女子大学との連携活動「祇園新橋の景観まちづくり」

森川宏剛専務理事からは、まず、京都景観フォーラムのミッションということについてお話があった。「地域住民が主体となって、自分たちのまちの景観まちづくりを進められる社会をつくる」ために、地域の景観まちづくりを支える専門家として、京都景観エリアマネージャーの養成、ネットワーク支援を行っている。また、NPO法人京都景観フォーラムの2016年度「ANNUAL　REPORT」を配布くださり、限られた講演時間の中で、一同が、京都の景観への取組みについて、情報共有をはかることができた。京都女子大学と連携した取組みとして進めている祇園新橋地域についての説明では、風情と文化を受け継ぎ、育むために、「祇園新橋景観づくり協議会」が3月に設立されることを発表された。現在進めている祇園新橋地域での、学生の前撮り事業者の実態調査について、今後、地域側も学生を育てていこうというマインドを共有すること、大学側も地域の目標やまちづくりの文脈を常に共有することが必要だと指摘があった。

5. 京都女子大学 家政学部 井上 えり子 准教授 「地域の中で学ぶ」

本学、井上 えり子准教授からは、①URと学生が連携した住宅リノベーション、団地のコミュニティサポート②空き家調査と空き家対策活動について事例紹介された。

①の活動は、2013年より継続的に行われ、2年に1度、学内コンペを実施し、優秀作品を竣工するという方法で、2017年3月現在、12プラン、50戸を供給している。この活動は、学生が、若い家族向けプランを設計することで、高齢化が進む団地に若い

家族を呼び込むという効果をもたらしている。また学生にとっては、より実践的な学びができる場となっている。年一回のフリーマーケット開催や、月1～2回の講習会、居住者とともに行うDIY等のコミュニティサポートは、地域に期待されることで学生が大きく成長すると語られた。

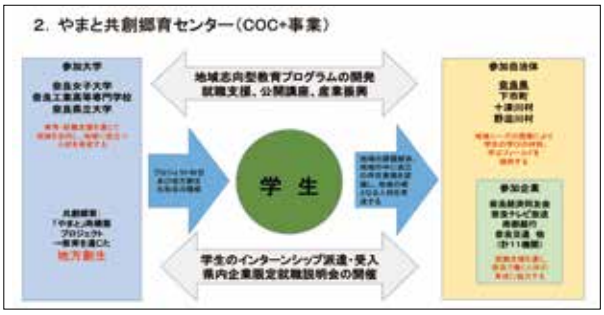
②は、東山まちづくり支援事業として、東山区の空き家調査をそれぞれの地域と共同で実施し、2015年度からは、空き家見守りボランティアとして、学生が、空き家の所有者から鍵を預かり、月1回、内部の換気や点検をし、報告する活動である。活動を通じ、所有者が空き家の活用を決心し、学生が改築案を提案する計画も現在、進行中だ。地域に求められていることを自分自身で考えながら活動することで、学生が自身の役割を見出すことにつながるという教育効果が得られいる。

講演：「奈良県の地方創生に向けた大学と行政の連携」

6. 奈良女子大学 副学長
やまと共創郷育センター長 藤原 素子様
「奈良県の地方創生に向けた大学と行政の連携」

奈良女子大学の藤原素子副学長は、同大学のやまと共創郷育センターが取り組んでいる「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」について説明された。奈良県では若者の人口流出が著しいことから、地方創生における大学の使命として、地域で活躍する人材の育成を柱に、地域活性化を目的とする自治体や企業との協働、地域での雇用創出による学卒者の地元定着率向上を挙げられた。

また、現状では県外での就職を希望する学生が多いという同大学の調査結果から、地域志向科目（キャリア科目「日本一の奈良を知る」、下市町をフィールドとした「コミュニティ・リサーチ」など）の開設や県内企業を対象とした魅力発見セミナーの実施など、具体的な取組みが紹介され、奈良県が抱えている課題と解決に向けての試みについて共有した。



7. 奈良女子大学教務補佐
よしの農林業週末塾代表、ゲストハウスApricot運営、ヨガインストラクター　秋谷 奈美様

秋谷様からは、下市町地域づくり推進課設立に関わられ、平成25年7月に設立された経緯や継続されている取組みについて、紹介された。平原地区での本格ピザハウスオープン、ハーブティー販売、才谷地区でのゲストハウスなど、具体的な地域おこし事例と、きめ細やかなサポート活動に一同が興味深く聞き入った。

奈良女子大学では、下市アクティビティセンターをサテライトとして平成28年7月に設立し、下市町でフィールドワークを行う活動をされている。また、このセンターは、移住定住や子育て事業にも活用されている。活動拠点としての下市アクティビティセンターの利用にも触れていただいた。学生が現場で学び、住民も元気になる取組みをめざし、コーディネーターとして活躍されている貴重な体験や情報を知ることができた。スライドでは、具体的に学生とのライン履歴を見せていただき、コミュニケーションを重視した丁寧な対応で、活動に取り組まれる様子がうかがえた。最後に示されたまとめでは、実際にその地域に入り、連携活動の体験の中から生まれた貴重な意見が盛り込まれていた。

◎レセプション　17時～18時

A校舎地下食堂に、場所を移してのレセプションでは、出席者同士の距離が縮まり、活発な意見や情報の交換が行われた。

奈良女子大学 小路田 泰直 副学長による乾杯

京女大と奈良女大
地域との連携議論
合同シンポに60人

京都女子大と奈良女子大の合同シンポジウム「女子大学の未来　地域社会とともに歩む女子大学」が13日、東山区の京女大であった。関係者ら60人が集まり、地域社会における女子大の役割や連携活動について議論した。

両大学は昨年9月、女性リーダーの育成に向け、国立、私立の枠を超えた「包括交流協定」を結び、シンポでは、京女大は近くの京都市所在などとの連携活動を、奈良女大は県内の自治体との連携の事例などを紹介した。

奈良女大同学長の藤原素子さんは「自分たちだけでは狭くなりがちな視野が広がった」、京女大地域連携研究センター長の竹安栄子さんは「地域づくりのために行動する女性人材の育成ということでは、両大学は共通している」と話した。

朝日新聞
2017年3月14日　朝刊
25面（京都）に
掲載されました

Ⅳ 履修証明プログラム

京都女子大学は、平成27年度より学校教育法の定めにもとづき、大学での一つのまとまりのある学習プログラムとして履修証明プログラムを開設している。

当該プログラムは、本学の授業科目とプログラム独自の講習を組み合わせて履修することによって、体系的な知識や技能の習得を図るもので、その成果として京都女子大学が学校教育法第105条の規定にもとづく履修証明書を交付している。

平成28年度は「京都案内マイスター養成プログラム」「仏教プログラム」の2講座を開講した。

1 京都案内マイスター養成プログラム

◆開講コース

◎京都英語案内マイスター養成・初級コース

◎京都日本語案内マイスター養成・初級コース

◎京都中国語案内マイスター養成・初級コース

◎京都中国語案内マイスター養成・中級コース

◎京都マイスター養成・初級コース

◆受講生の声

- 若い人の考えを聞けて、楽しく過ごせた。教養科目が大変勉強になった。京女は学生の質が高い。
- 京都の地で、生きた歴史を勉強することができ、幸せだった。暮らしの中で学びを感じられた。
- 思ったより、学生のレベルが高く、予習が大変だった。学生の真剣な取組みに感心した。プライベートな話も学生として、学生生活をおくることができ、楽しかった。

平成28年度履修プログラム修了式の様子

2 仏教プログラム

◆開講プログラム

◎仏教プログラム

◆受講生の声

- 学生の視点に感心している。学生の感想も励みになった。「縁」や「空」の話は難しかったが、これからの人生や生活にきっと役に立つと思う。女子大生の気分で学生生活を経験できてよかった。
- 6科目の授業はなかなか厳しかったが、本だけでは学べない基礎的な部分が学べてよかった。また、学生と研修旅行に参加したこともいい経験となり、楽しかった。
- 毎回の授業が楽しくて、学生と学ぶことが励みになった。毎回、一番前の席で授業を聞いており、有意義だった。

V 平成28年度冬季特別公開講座等
（地域とともに歩む女子大学）

主に京都市を中心とする地域における市民の教養の啓発を目的として、京都女子大学の教育・研究資源を活用した冬季特別公開講座を開催した。

冬季特別公開講座では全4講座を開講。統一した冠テーマ「地域とともに歩む女子大学」を掲げ、それぞれの講師の専門性に応じたテーマ設定のもとに、講座ごとに受講者を募集した。

講座については比較的に小規模な講座を想定し、開講時間も90分程度として、定年後の団塊の世代や主婦層等が気軽に受講できるよう平日昼間の開講も組み込んだものとなっている。

また、児童学科主催の子育て支援講座もミニ講座とあわせて実施した。

▶ミニ講座

開催日時・会場	講座名・講題	講　師
2月22日（水）15:00～16:30 会場：A301	「社会的困難を生きる若者と学習支援」	発達教育学部教授 岩槻　知也
2月24日（金）13:00～14:30 会場：A301	「ふくらはぎの誘惑 ―久米仙人説話追跡―」	文学部教授 中前　正志
2月28日（火）13:00～14:30 会場：A301	「現代日本人の意識と若者世代」	現代社会学部教授 亘　明志
3月4日（土）13:00～14:30 会場：U101（幼児教育棟1階 子育て支援ルーム）	「親子人形劇講座 ―スカーフで作る糸繰り人形―」 ＜事前申込制/先着6組＞　託児サービス有	発達教育学部准教授 松崎　行代

▶児童学科子育て支援講座

開催日時・会場	講座名・講題	講　師
3月1日（水）9:30～12:30 会場：U101（幼児教育棟1階 子育て支援ルーム）	【児童学科子育て支援講座】 「心をほぐすアートセラピー ―かたち・色・コラージュで遊ぶ―」 〈事前申込制／先着15名〉託児サービス有	発達教育学部教授 古池　若葉

「親子人形劇講座
―スカーフで作る操り人形―」の様子

「ふくらはぎの誘惑
―久米仙人説話追跡―」
講座の様子

「心をほぐすアートセラピー
―かたち・色・コラージュで遊ぶ―」
講座案内チラシ

Ⅵ その他の連携活動

小学生対象の英語イベント

平成28年11月21日、鎮西敬愛学園敬愛小学校（北九州市）の3年生40人が本学を訪問し、キム・ブラッドフォード＝ワッツ先生（外国語準学科）の授業に参加した。

鎮西敬愛学園敬愛小学校は、1年生より週2回のネイティブ・スピーカーによる英語の授業を実施しており、3年生の中にはすでに英検準2級を保持する児童もいるほどレベルが高い。

ブラッドフォード先生の授業では、本学の学生20人が児童たちを迎え、グループに分かれて英語の歌や、英単語のビンゴゲーム、英語のクイズ等で盛り上がった。児童たちからは「楽しかった。わからないところは大学生のお姉さんが優しく教えてくれて嬉しかった。」「今日教えてもらったゲームは、帰ってからもやりたい。」など嬉しそうだった。

京町家特別公開講座（重要文化財 奈良屋記念 杉本家保存会）

平成28年度においても、国の重要文化財である杉本家住宅（京町家）において講座を実施した。いずれの講座も定員を超える申し込みがあり、抽選の上、50名（女性のみ）を招待した。普段は入ることのできない重要文化財の住宅での講義ということもあり、大変好評だった。

講座風景

平成28年10月18日（火）

京の町家と暮らし

杉本　歌子 氏

（公財）奈良屋記念杉本家保存会　学芸部長

京都・町家の老舗ー歴史的看板見て歩きー

出井　豊二 氏

京都女子大学生活デザイン研究所副所長・特任教授

平成28年11月7日（月）

町家で育てられた日々

杉本　千代子 氏

（公財）奈良屋記念杉本家保存会代表理事

町家で聞く仏教の話～仏陀、浄土、そして親鸞

清基　秀紀 氏

京都女子大学　仏教学非常勤講師

平成29年2月23日（木）

京町家に伝わる和食の文化
～江戸期の料理本と町衆の食事～

杉本　節子 氏

（公財）奈良屋記念杉本家保存会事務局長

100歳まで生きた～山田恵諦天台座主の思い出～

吉澤　健吉 氏

京都産業大学文化学部教授

ニューイヤーコンサート

平成29年1月15日（日）午後3時より、京都コンサートホール大ホールにてニューイヤーコンサートを実施した。今回は、「Made in Japan ー日本の心　和の響きー」と題し、日本の作曲家による作品を集め、ピアノ連弾や2台ピアノのための作品、歌い継がれている唱歌や本学教授安村好弘先生による委嘱作品など「和」の音の世界を届けた。

当日は、大雪の悪天候にもかかわらず、1,000名を超える来場者があった。

今回は、オープニングのアナウンスや出演者のドレスのデザイン・製作を本学の学生が担当する等、学生も主催側として参加したコンサートとなり、来場者にも好評だった。

京都女子大学地域・産学官連携ポリシー

（平成29年2月9日制定）

京都女子大学は、創立以来、女性教育のパイオニアとして多様な分野で活躍する女性を輩出してきました。

本学では親鸞聖人の体した仏教に基づく教育を行うことを建学の精神としています。その目的は、人間教育にあります。仏教を通して自己を見つめ自己中心的な姿を明らかにします。互いが自己中心的存在であることを認め信頼関係を構築していきます。現実の諸問題に対しても、問題の本質を捉え、積極的に取り組む人間形成をめざした教育を実践しています。

この建学の精神に則り、京都女子大学は、地域社会、国と地方公共団体、産業界、そして国際社会の発展に寄与する地域・産学官連携を教育と研究に並ぶ大学の使命の一つとして位置付け、この使命を実現するための基本方針として、以下の通り「地域連携ポリシー」および「産学官連携ポリシー」を定めます。

《地域連携ポリシー》

1. 本学の建学の精神に鑑み、地域社会との持続的な連携を行い、地域社会の活性化のために貢献します。（社会貢献）
2. 地域連携活動を通じて、地域に関する教育・研究の進展を図るとともに、地域社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。（教育研究促進・人材育成）
3. 地域連携により得られた知の成果を広く社会に還元し、地域社会と地域課題の共有に努めます。（地域課題の共有）
4. 地域連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。（体制整備）
5. 地域連携活動を大学の自己評価に反映させます。（自己評価）
6. 本学の地域連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。（情報公開・広報活動）

《産学官連携ポリシー》

1. 公的機関・企業等との共同研究・受託研究等を積極的に推進し、社会・経済の発展に寄与するとともに、本学の教育研究活動の基盤向上を図ります。（共同研究）
2. 産学官連携活動から得られる成果を本学の教育・研究の促進に役立てます。（教育研究促進）
3. 産学官連携活動を通じて、社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。（人材育成）
4. 本学と公的機関・企業等との組織間の明確な契約による連携を基本とし、産学官連携により得られた知的財産を適切に保護・管理し、有効活用していきます。（知財管理・活用）
5. 透明性の高い産学官連携活動を行い、説明責任を果たします。（説明責任）
6. 産学官連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。（体制整備）
7. 産学官連携活動を大学の自己評価に反映させます。（自己評価）
8. 本学の産学官連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。（情報公開・広報活動）

以　上

平成28年度主な活動実績

日　付	内　容
2016/4～7（前期授業）	朝日新聞社寄附講義開始
2016/5/12	京都刑務所刑務官対象の呼吸法講習（ガハプカ先生）
2016/9～2017/1（後期授業）	三井住友銀行寄附講義開始
2016/9～2017/1（後期授業）	阪急電鉄寄附講義開始
2016/9～2017/1（後期授業）	野村證券寄附講義開始
2016/6/14　他	京都市中央卸売市場　すし市場「まちおこし寄席」出演（落語研究会）
2016/7/8	三井住友銀行との協定締結
2016/7/27	京都刑務所との協定締結
2016/9/13	元吉町まちづくり部　第22回意見交換会
2016/9/23	奈良女子大学との協定締結
2016/10/9	あじわい館イベント「京の食育ワンダーランド」ブース・イベント出展（中山ゼミ）
2016/10/11	元吉町まちづくり部　第23回意見交換会
2016/10/13	東山総合支援学校との協定締結
2016/10/22･23	京都刑務所　第39回矯正展への出展（ワクワク工作キャラバン）矢野ゼミ
2016/11/8	元吉町まちづくり部　第24回意見交換会
2016/11/8･9	先進大学視察（前橋国際大学、鶴見大学、横浜国立大学）
2016/11/18	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習①（ガハプカ先生）
2016/11/18･19･20	東山南部地域活性化委員会　太閤まつり
2016/11/23	京都市中央卸売市場「鍋まつり」ブース出展（中山ゼミ）
2016/11/24	元吉町火焚祭　手伝い
2016/11/28	第1回教育プログラムチーム開発会議
2016/12/2	京都刑務所　防災訓練参加（総務部）
2016/12/6	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習②（ガハプカ先生）
2016/12/8	京都銀行との協定締結
2016/12/13	元吉町まちづくり部　第25回意見交換会
2016/12/14	京都励学国際学院との協定締結
2016/12/15	交通安全啓発イベント参加（ガハプカ先生、ゼミ生）
2016/12/19	弥栄自治連合会すこやか学級「第1回健康づくりのための呼吸法」
2016/12/20	第2回教育プログラム開発チーム会議
2017/1/5	第3回教育プログラム開発チーム会議
2017/1/10	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習③（ガハプカ先生）
2017/1/10	元吉町まちづくり部　第26回意見交換会
2017/1/17	NPO法人京都景観フォーラムとの協定締結
2017/1/20	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習④（ガハプカ先生）
2017/1/23	弥栄自治連合会すこやか学級「第2回健康づくりのための呼吸法」
2017/1/24	東山南部地域活性化委員会
2017/2/6	ムーンバット㈱との協定締結
2017/2/9～11	酒造り体験（招徳酒造）①
2017/2/13	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習⑤（ガハプカ先生）
2017/2/15	ハイアットリージェンシー京都との協定締結
2017/2/16～18	酒造り体験（招徳酒造）②
2017/2/17	京都市「学まち連携大学」促進事業と「京（みやこ）グローバル」促進事業の学内説明会（公聴会）
2017/2/17	大阪ガスとの協定締結
2017/2/19	東山南部地域活性化委員会
2017/2/20	弥栄自治連合会すこやか学級「第3回健康づくりのための呼吸法」
2017/2/22	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習⑥（ガハプカ先生）
2017/2/22	京女ネットワーク協議会（京女ラウンドテーブル）第1回会議
2017/2/24	元吉町初午　手伝い
2017/2/27	元吉町まちづくり部　第27回意見交換会
2017/3/7･8	先進大学視察（福岡工業大学、長崎国際大学）
2017/3/10	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習⑦（ガハプカ先生）
2017/3/13	京都女子大学×奈良女子大学　合同シンポジウム
2017/3/13	弥栄自治連合会すこやか学級「第4回健康づくりのための呼吸法」
2017/3/14	元吉町まちづくり部　第28回意見交換会
2017/3/14	先進大学視察（相模女子大学）
2017/3/18	祇園新橋景観づくり協議会　設立総会
2017/3/22～24	酒造り体験（齊藤酒造）
2017/3/24	京都刑務所刑務官対象の呼吸法シリーズ講習⑧（ガハプカ先生）

■連携協定締結先一覧

東山区役所	株式会社朝日新聞社
東山区社会福祉協議会	野村證券株式会社
京都市中央卸売市場第一市場	京都刑務所
近畿中国森林管理局「遊々の森」	京都市立東山総合支援学校
京都府警察本部	奈良女子大学
京都大学（大学院生命科学研究科）	株式会社京都銀行
東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会	京都励学国際学院
鳥取県・ふるさと定住機構	NPO法人京都景観フォーラム
阪急電鉄株式会社	ムーンバット株式会社
招徳酒造株式会社	ハイアットリージェンシー京都
齊藤酒造株式会社	大阪ガス株式会社
株式会社三井住友銀行	京都信用金庫

Access Map

◎JR・近鉄「京都」駅から

市バス206系統・208系統または100系統で約10分、「東山七条」で下車し、東へ徒歩約5分。

◎京都駅八条口から

プリンセスラインバスで約10分、「京都女子大学前」で下車。

プリンセスラインバス
※スクールバスではなく公共の交通機関です。

◎阪急「河原町」駅から

◆1番出口から、徒歩約5分で京阪「祇園四条」駅へ、京阪「七条」駅で下車し、東へ徒歩約15分。

◆6番出口から、市バス207系統で約15分、「東山七条」で下車し、東へ徒歩約5分。

◆2番出口から、河原町通を南へ約80m、プリンセスラインバスで約15分、「京都女子大学前」で下車。

◎京阪「七条」駅から

東へ徒歩約15分。

The Research Center of
Community Partnerships

編集・発行

京都女子大学 地域連携研究センター

編集責任者：地域連携研究センター長　竹安 栄子

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町35

TEL. 075(531)7080
FAX. 075(531)7064

E-mail：r-suishin@kyoto-wc.ac.jp
URL：http://rccp.kyoto-wu.ac.jp